

### 第3回 養父市振興計画審議会 議事要旨

日 時 令和3年6月18日(水) 13時30分～15時30分  
場 所 八鹿公民館 2F 展示室(およびオンライン会議)  
出席者 委員 現地:畑正夫(会長)、福井啓子(副会長)、秋山卓寛、上垣秀和、  
片岡高市、小泉一輝、佐々木秀行、大封健太、栃尾英一、中島高幸、  
松田佳苗、宮本早紀、宮本裕美  
オンライン:西谷秀和、田渕和香菜、村上裕樹  
事務局 経営政策課 田村亘、岡山慎、渡邊宰

#### I. 進行状況等

1. 開会
2. 議題等  
(1) 答申案の作成、修正案の作成に向けて
3. その他
4. 閉会

#### II. 議事等

市経営政策課(事務局)から市民アンケート、高校生アンケートの結果に関する説明、これまでの意見のまとめに関する説明がなされた後、意見交換が行われた。主なやりとりは以下のとおり。

- (会長) 足りない視点、もう少し重視すべきこと、あるいは、いま出ている意見を膨らませるべきものについてご意見いただきたい。
- (委員) 抽象的な表現が多いため、もう少し具体的なことに迫っていく計画となれば良いのではと感じている。特に教育の分野に関してどのような形で修正案がでてくるのか拝見したい。
- (会長) 今回のまちづくり計画の特徴的な部分として、2050年の養父市を展望していることがある。これについては、抽象的な表現を避けることができないだろうと考えている。おそらく市としては、計画の中身については、計画を実際に動かしながら具体的なものにしていきたいと考えているのではないかと受け止めている。計画では方向性を示し、住民も企業も他の地域の人たちも巻き込んで地域づくりを考えたいという思いがあり、その中身はどうしても抽象的な表現にならざるを得ない部分もあるため、この辺りは皆様に了解いただくことも大切なことかと考えている。
- (委員) 人口増は大切なこと。社会増は他の地域と奪い合いになってしまいがちであるため、自然増を増やす事が出来ないか。また、姫路まで通勤圏になるまちにならないか。農など、まちの特色を創っていくことも重要であるが、なんの特色もないまちをつくっていくことも大切だと考える。

- (会長) 生活基盤、移動交通手段、こういうものも大切だというご意見だと思う。
- (委員) 人口増について、20年前から変わっていない。もっとひどくなっている。Uターン比率については女性の方が帰ってくる率が少なく、出ていく数も多い。まちに夢や希望があるとすれば出ていくこともないと思う。まちのPRについてもYouTubeなどに一本化していけば、特色があろうがなかろうが、有効に活用する方法はいくらでもある。
- (会長) まちに夢がある、希望があるというのは重要なキーワードである。そのうえで、活動を支援する基盤が必要であるということ。そこには、おそらく挑戦する人が必要。夢や希望がある人が挑戦できる環境をどうつくっていくかということが大切。子どもたちは学びながら養父市から離れていくような感じなのか、養父市で何かやってみたいという子どもたちがいるのかどうか。大人たちは、子どもたちに挑戦してほしい、愛着を持ってほしいということを思っているが、まちづくりに有益な人材というのは自然に育っていると感じているのだろうか。
- (委員) もしかすると、教員として養父市を意識した取組をしようという気持ちが不足しているのかもしれない。授業の中には、文化や産業など、まちづくりに関する様々なものを取り入れているが、それらが、子どもたちに将来住みたいと思ってもらえるようなアプローチになっているのかと問われると、もしかしたら伝わっていないのかもしれないし、教員の熱量が足りないのかなとも思ったりもする。
- (委員) 養父市社協が進める学校教育の福祉学習では、車いす体験や点字学習、アイマスクの体験教室などを行っているが、基本的に福祉という分野は人権学習が大きなところ。子どもたちには、誰もが気持ちよく幸せに暮らしていくためにみんなでまちづくりに取り組もうと話したうえで福祉学習を進めている。基本構想策定のためのアンケートの質問に「あなたにとって暮らしやすいまちですか」という設問があるが、高齢化率の高い大屋地域の中でも「暮らしやすい」と回答している割合が高い地域がある。当然八鹿や養父に比べると不便に感じることもあると思うが、その中でも「暮らしやすい」と答えている割合が高いということは、近所、地域、家族のつながりが強いことから数字にも表れていると思う。これについては未来においても人と人とのつながりなくして満足いく暮らしはできないと考えるため、やはり人づくりの大切さを強調していただきたい。
- (会長) 今の暮らしの中でもつながりが人の暮らしを支えているということだろう。このことはデジタル化で何かしようと言う前に触れておくことが重要。暮らしやすさというのはつながりが重要な役割を果たしている。それをデジタルの世界も使いながら拡張するという考え方に整理していけばよいのではないかというご意見。そのなかでは地域をよく見て学習していく学び方が重要だということではないか。
- (委員) 行政で福祉の取組をするのは地域としては非常に有難いが、それを区長に任せてしまうのは困る。いま、区長のなり手が少なくなっている。地域では高齢者も増え、区長の仕事は増える一方である。やり方として、福祉分野については行政がし

- (会長) っかりとやって、区の組織が負担に思わないような取組をして頂けたらありがたい。まちづくりを誰とどんなふうにやっていくのかということ。初めからすべてを区長に任せてしまうと、区長が対応していますからとなってしまいます。できるところ、やりやすいところ、これから深刻になっていく課題を踏まえてどんなふうにやっていくのかをみんなで考えることは、長期を考えていくうえで重要な視点になってくる。
- (委員) 将来の養父市に対しての計画であり、養父市にもいろんな考えの人がいらっしやる。その一人ひとりが楽になる、それぞれの方の考え方を活かしていける計画づくりをしていかなければならないため、細かいことまで決める必要はないのでは。いろんな可能性を秘めた方もいる。「誰もが活躍しなければならない」という文言も入っていたと思うが、そんなことをしたくないという方もいるため、こちらの価値観を押し付けることも良くない。全体の振興計画というものは、ふわっとしても良いと感じる。
- (会長) まちづくりは強制するものではない。やはり自発的な取組が大切である。あるいはその人が持っている個性や特徴、能力、力を、それぞれの方がそれぞれに考えて行動する。そういった方向性を示すもので、取組のなかに入っていくことは比較的自由ですよとした方が良いかもしれない。「誰もが」というのは使いがちな言葉であるが、「取組に参加しやすい」、あるいは「それぞれが力を発揮できる」、「それぞれが考えて行動できる」のように柔らかい表現にした方が、多くの人が強制されている感じがしないと感じるかもしれない。
- (委員) 「全体として地域が良くなるから人が来るという考え方で、全市的に人口減少をどうするかということが書いてあれば、それをきっかけに取組がつながってくるかもしれない」というのは、確かにその通りである。人口がある程度減っていくのは仕方がないのかもしれないことで、定住人口にこだわるのではなく、関係人口や交流人口という考え方が最近は多くなっている。観光もそうであるが、友人や家族らが、何かしら養父市と縁を持ってもらうために、大きな目標や道筋を創っていくことが重要であると考えます。また、養父市の魅力とは何かを考えた際に、両親、家族がいるということはもちろんそうではあるが、アクセスが良いことが挙げられる。但馬のどこでもアクセスが良く、スキー場も近い。医療や教育面からしても、高校も2校ある。仕事目線ということもおっしゃったが、周りの人に豊岡や朝来に行って稼いで帰ってくる人も多いため、必ずしも養父市での仕事を考えなくても良いのでは。目指すべき方向としては、医療や教育が充実した住みよいまちづくりを考えていった方が養父市の強みを生かせるのではないかと考える。
- (会長) 特徴的なキーワードとしては、人口の捉え方に関する表現。「縁」や「つながり」などのことばを上手く使って人口についての考え方を示すことが大事なのではないかということが一つ。そのうえで、どんな風にしていくかというもう一つのキーワードは「道筋」。「道筋」ということがとても重要だということ。養父市の魅力としてすべてのものを持ち合わせる必要があるのか、というのが産業の話だと

は思うが、もちろん地元の農業や林業などの産業的な活動は展開されているため、そういった仕事・生業をどうするのかという点は重要ではあるが、あまりそこにこだわらなくても良いのではというご指摘だった。

(委員) 「子育て」を「子育て・子育て」と表記してはどうかという提案をさせていただいた。これが、教育の施策と関係していると思う。現在子育て中であるが、小学校のふるさと学習は想像していた以上にたくさんしていると感じている。先生方からは、ほかの行事を入れられないくらいふるさと学習をしなければならないという声もある。以前、キッザニアの養父市版のような取組をしていたことがある。様々な企業さんが協力し、車屋さんになってみるとか、看護師さんになってみるとか。こういう自発的に学ぶ環境が子どもたちを育てていくことを実感した。教育というと大人から子どもに一方的な感じがするが、子どもたちが自発的に学ぶことができるようなふるさと教育、という思いで「子育て」という表現を入れたいと考える。例えば、豊岡では毎年県民局が産業フェアをしており、但馬内の企業が集まっている。元々は企業間の取引ができるようにと始まった取組であるが、今では、学校でも大きく取り上げられていて、近隣の中学生や高校生が参加している。養父市の学生らも参加しやすいような環境を整えたい。もう一つの自発的な取組として良いと感じるのが、建屋小学校の取組。市内のどこからでも通うことができ、子どもが自分で選んでいくこともできる。そういった子どもたちの選択肢が広がるような地域を学ぶ環境づくりができれば良いと感じている。

(会長) 自発的に成長して体験していくことができる機会をつくっていくことが大切だというご意見。いろいろな形、環境をどうとらえていくかという課題の一つに入ってくるのではと考える。それが、もしかしたら挑戦につながるかもしれない。プラットフォームやインフラという言葉が出てきているが、こういった仕組み、基盤のようなものをどうつくっていくかというところに力を今後入れていくべきだというご意見だとお聞きした。特に、子どもが外に出ていってしまうまでに、何らかの対策をとっていくべきだということ。

(副会長) 京都や大阪など、但馬外に出ることもあるが、但馬で良かったなということをいつも感じる。しかし、夢や希望のある生活基盤がないと子どもたちも帰ってこないと思う。ひとつひとつつながりをつくっておけば、外から見ても但馬の良さが分かり、帰ってくると思うが、帰っておいでというためにも生活基盤が一番大切だと思う。

(会長) つながりをどう居住してくることに繋げるのか。あるいは、本日「人口の奪い合い」という話があったが、その場所で住みながら養父市とのつながりを密にする。単なるつながりがあるだけではなく、つながりを深めていけるような仕掛けや仕組み作りが大切。きっとこれが移住につながったり、移住ではなくても養父市のまちづくりのパートナーとなったり、そういう位置づけに人口として考えていくことが可能になってくる。単なるふるさとと納税等だけではなく、もう一步踏み込んだ関係性を築いていくことが大切。

(委員)

先ほどでたキッザニアは南但青年会議所というところが主催しており、人口減少が進むなかでも、魅力を伝えていこうという事業目的でボランティア的にしている。学校の先生は、地域の魅力を伝えることはできても強制することはできないと思うので、そこはやはり民間である商工業者がしていかなければならないと思っている。トライやるウィークという取組もあるが、地元の魅力を感じて帰ってきたいと思ってもらうために、地元の職業への定着性を高めることが大切なことの一つだと考える。朝来市では、小学校に行って地元の仕事のPRをさせてもらったこともあるが、そういう場をつくっていただけると感じている。また、経済的な施策が少ないのではと前回指摘させていただいたが、直面しているコロナの影響から都市部にお金が流れていって、事業計画なくお金を借りざるを得ない状況が結構ある。このような状況の中、10年後20年後の事を考えてくださいというのは企業としては無理がある。5年後などの目先の安心感があってこそ10年後20年後の事は考えられると思う。また、PDCAサイクルでやっという書いてあるが、いまその速度で考えて追いつくのか。アメリカや大企業では実行、修正の2点突破で進めており、リスクはあるけれども、世の中の流れでは計画や評価をしている暇はないのではないかと考えられている。リスクをとってでもスピード感をもってチャレンジしていくことが重要と考える。

(会長)

民間の自発的な取組の重要性。これが、今回のまちづくりの中で行政だけの計画ではなくて、市民も巻き込んだ計画だということにするのであれば、それを上手く支える機会づくりがきっと大切だということ。それがあってはじめてはっちゃけた取組もできるかもしれない、ということなのではないか。また、長期を考えると今の目の問題がなおざりになりがちだという点。コロナ禍で事業経営されている人は休業に追い込まれていることは事実だと思う。今回この時期に策定するからには、少し配慮する記述がなければ将来に目を向けられないかもしれない。簡単なことでも良いので、現下の厳しい状況の中で取組をどんなふうにかという視点を欠いておくことが大切。PDCAサイクルについては、問題は解決策が見つからないことが前提になった議論が進んでいる。なので、PDCAサイクルがそもそもないという考え方。特に数値目標を設定する時に、その目標にどれくらいの意味があるのかということを考えることが重要ではあるが、ひとつの目安ということで目標を考えていきながら、取組を進めるなかで新しい目標を発見していくことが、実行して修正していくことにつながっていくのかと思う。

(委員)

教育、子育てに関することがたくさん入っていると思う。ふるさと教育ということで、ふるさとをテーマとした教育は推進しているが、はたして子どもたちが将来養父市に住みたいと思えるものになっているのかどうか、学校としても振り返らないといけなかった。今回の計画について、教育のことはそれほど見込んでいないように感じていたが、南但青年会議所の取組も素敵であり、そのような話に出てきた内容で計画にも盛り込まれると、学校の教員もそれを踏まえて取り組むこと

が出来るのではないかと考える。

- (会長) 教育については教育基本計画があるようだが、まちづくりの方から教育に求めるものが多くなると、現場の先生方がとても大変だという事情もあると聞いている。
- (委員) 人口に関することは、多くの方が不安に感じているところなのでしっかりと盛り込んでいかなければならない。関係人口が増加することによって養父市にどういった良いことがあるのかをたくさんの人に分かりやすいように盛り込むと良いのではないかな。
- (会長) 人口については数ばかりが議論されがちなので、人口が持つ意味をどんなふうを考えるのかということが重要だというご指摘。つながり人口が増えたと、それはどういう意味があるのか、養父市とつながりを持った人口がどんな意味を持ちそうか、それを明記することが重要だというご意見。
- (委員) 子どもたちにはなるべく地元に戻って来てほしいと伝えているが、働ける場所があるようにまちづくりをしていかないといけない。親御さんが子どもたちにしっかりと帰って来いといえるようなまちづくりができればと思っている。
- (会長) 住みたいまちだけではなく、帰ってきたいと思えるまち。そういうまちづくりも大切だというご指摘。なかなか親御さんらも帰って来てとはいえないのかもしれないということが数字にも表れている。難しいかもしれないが、取り組みがいがあることかもしれない。
- (委員) 養父市の中にも行政区が沢山有り、そのなかにも消滅するような地区もある。そのような地区でも少人数ながらも伝統を守りつつ頑張っている地区もあるが、なかなか今までやってきたことを存続することが難しいことを聞いている。行政区を変更し、まちづくりの単位を変えていくことで存続できることもあると考えるが、行政区の変革はできるのか。
- (会長) なぜ、いまの行政区になっているのかということも併せて事務局に説明いただきたい。
- (事務局) どのような経緯で今の行政区になったのかについては分からない。養父市になるまでは4町であり、その前もそれぞれの村が統廃合により町になっている。その村の時代からの集落、行政区が今につながっていると考える。行政区が統合しているということは最近ではないが、集落が消滅していつているところはある。ここ最近では、集落の統合はなかなか難しいこともあり、合併してから進めているのが地域自治組織と言われる組織を立ち上げである。養父市では、合併以前の旧町時代の小学校区を1つの区域としてそれぞれの地区が組織しており、生活の基盤部分、特に、文化活動や高齢者福祉の面でも平等にやっといこうとスタートしている。お祭り等については神社やお寺の関係からなかなか集落が交わらない点でもある。集落の存続についても高齢化率が60%を超える集落もあり、その部分をどうしていくのかということについては市としても課題であると捉えている。
- (会長) 最後、生活のレベルに入ってきたときに、住んでいる近隣の環境は非常に重要な役

割を果たす。そのなかで、自分のできることもきっとあるだろうし、コミュニティの基盤のような話になってくる。集落間のつながりや関連性のなかで上手く地区の力を再生、高めていくことも課題。おそらく、旧町ごとにも成り立ちが違うため、地区別の計画を作っていくときに、近隣のコミュニティ同士の関係性をよく考えて取り組むという視点を持つべきだと感じた。

(委員) アンケートの集計を見て、意外に養父市に戻ってきたいと思っている学生は少ないと感じたが、10年後に向けた夢や意気込みの回答を見てみると、「養父市をこれからも大切にしていきたい」や「地元に住んでいなくてもいろんな形で関わっていききたい」、「大学を出て養父市で仕事をしていきたい」など、いまからしっかりと想いを持っている学生も何人かいる。それは、親御さんからの影響もあると思うし、学校で地域について考えるなかで、このような回答が出てきていると思う。ただ、大学などで養父市から出て就職先となると、養父市に帰ってきて就職することは難しいのかもしれない。都市部で就職し何年か経ったのちに養父市に帰ってきた友人もいる。YouTubeも含め、いろんな媒体を使って養父市のことについて発信することは重要だと考える。また、先日、地域のことの困りごとに関して地域の方とお話しする機会があった。地域にはご家族も近くにおらず一人で暮らしている方も居るなかで、近隣にお住まいの方がどこまで手を差し伸べて良いものかわからないとおっしゃる方もいた。地域の担い手不足のなかで、若者に魅力的なまちづくりの難しさも感じる。いまいる人材でどんなことができるのかを考えていかなければならない。

(会長) 帰ってきたいと書いている高校生がいることは心強い。こういった多様な居住ニーズにどんなふうに対応するのかというのが居空間のねらいの一つかもしれない。構想のなかに実際に高校生たちのこういった声があるということを重ねて書くことで、自分たちの子どもたちとの新しい関係性の作り方だと考えた方が良いのかもしれない。メディアの有効活用については、ターゲットを明確にして上手い情報発信を考えることが必要。専門セクションだけでなく、みんなでどう発信していくかが重要。最後の、孤立高齢者をどうするかという点は都市部でも大きな問題となっている。普段からの声掛けがとても重要だという話だったと思うが、つながりという視点で考えると、つながりの距離感というようなもので、そっと見守ることから、危機的な状況となれば介入していくことも必要かもしれない。そういうつながりの取り方が移住してきた方には難しいかもしれないが、つながりの段階というものを考えておくことが実行段階では重要かもしれないと考えた。

(委員) 計画策定の趣旨を改めて読んでみると、持続可能なまちづくりについて記載があるが、それがすべてなのではないかと考える。住んでいる人が住み続けられるという部分を行政がある程度フォローしつつ、みなさんが夢をもって生活していくような、夢のあるまちづくりの部分もあるような、ふわふわした部分だけでなく、計画である以上もう少しベーシックな部分についても押さえておいていただきたい。経済的な問題や就業人口、行政の財政的な問題等についてもすこしは見込んで良いので

はと感じる。

(会長) 持続可能にするには、持続可能にする人たちの持続可能性をどうするか。計画においては、行財政自体をどうするかというよりは参考資料等においてカバーしていくことも大切かもしれない。将来のために住んでいる人が住み続けられるまちをつかっていくことに尽きる。このことを簡単に触れるだけでも良いので姿勢として明確にしておくことが重要。

(委員) 先日、林業についてテレビで取り上げていただいたことをきっかけに、それがYouTubeにも挙がっており、そのことに関する問い合わせを多く頂いた。YouTubeの有効性を感じた。

(会長) どのあたりに反響があったのか。

(委員) コロナの関係で自然に目を向けられている方が、それで生活ができるのか等について問い合わせがあった。

(会長) いろいろなところに関心が出始めたということかもしれない。

(委員) ウッドショックで木材価格が上がっている。そういった面からも注目が集まっているのかもしれない。

(会長) YouTubeの有効性ということだが、都市部の人が受け取りやすい情報というのを考えて発信することがとても大事なかもしれない。そうすることでバーチャルでつながっている市民の方の力も借りられるのかもしれない。

(委員) 施策の3-2「デジタル技術の積極的な推進」について、「条件不利地域であったとしても不便さを感じさせない社会構築に取り組んでいきます。」とあるが、10年先を見据える視点としては範囲が狭いのではないかと感じる。もう少し視野を広げるのが良いのでは。不便なものはもちろん解消しなければいけないが、便利なものは便利になれば良いと思うし、先端的なデジタル化に対応した社会構築を行うと表現するなど、数年後に陳腐化してしまわないような内容が良いのでは。

(会長) 「条件不利地」という言葉について、何となくこの地域で使うことが忍ばれるかもしれない。法律や制度のなかでは良く使われるが、整理した方が良いかもしれない。デジタルで損ねているものを復旧するという考え方ではなく、もっと創造的な使い方ができるような取組を示していくことが重要。1回目の審議会の中で「人材が確保できるのか」というご意見があったが、その後調べているとITの業界ですらデジタル人材の確保が難しいということが課題になっている。

本日は体系的にまとまったご意見が多いように感じるが、抜けている点等はないか。

(委員) ITの分野ではその分野に長けた人材を集めるしかない。また、スピード感。提案があったらすぐに製造等を行っていく会社もある。昔、養父町の時代に、制度の提案をしたことがあり、すぐに改正案を出して頂けたことがあった。いまの行政はそのスピード感が欠けているようにも感じる。この計画についても絵を描いただけで、10年後にも同じことを言っているような感じもする。

(会長) デジタル化を積極的に進めようと言っているのではなく、これから避けられない波



として、間違いなくこれまでのデジタルとは違う波がやってくるため、その波に押しつぶされないようにするためには、自分たちのデジタルに対する考え方を持っておかないといけない、という視点。

(委員) 今までやっていないような IT の活用の仕方を行政がやっていかないといけないということを提案したい。まちをあげてやっている地域はないのではないかな。

(会長) みなさんのご意見にも出ているように、デジタルばかりではない。やはりこの地域をどうするかという部分をきっちりと持った上で有効に活用していくという話になっていくのだと考えている。

(委員) さきほど行政区の合併という話が出ていたが、消滅しそうな地区がある。私の所属する自治協では、地区を越えて自治協単位で活動する取組を行っている。

(会長) 地区別の計画をこれからつくるとすれば、集落の構成メンバーが減り、高齢化が進むなかでの計画となっていくため、やはり日々の暮らしをどうするかという視点を重視しながら、それでも将来をどうつくっていくかということが大事になってくる。まちづくり計画全体と地区別計画全体の色合いは違うのではないかなといまのお話から感じる。